ぬくもり。

月影れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぬくもり。

【Ｎコード】
Ｎ２３２３Ｌ

【作者名】
月影れん

【あらすじ】
５月４日。今日はオレの誕生日。でもなんか様子がおかしいぞ！？探偵団のみんなには誕生日を祝ってもらえねぇし、蘭はおつかいなんて頼んでくるし……！それに新一の誕生日を祝うメールも蘭から来ない！！おいおい、みんなオレの誕生日を忘れちまったのかよ！？【２０１０年コナン＆新一誕生日記念小説】

（前書き）

我らが主人公、コナン＆新一の誕生日企画作品です。

――今日は5月4日。
ゴールデンウィークであり、みどりの日でもあり
……そしてオレの誕生日でもある。

実は、さっきまでそのことすっかりを忘れていた。今朝届いた業者からの（客の誕生日を祝う文面の）メールで思い出したのだ。
コナンと新一の誕生日は同じ日ということになっているはずだ。
だから朝飯の時、蘭に”コナン”の誕生日を祝ってもらえるだろう。
俺はそんなことを考えつつ、眠い目をこすりながら、服を着替えた。
そして、よい香りのする居間へと急いだ。

そこでは蘭が朝飯の準備をしていた。準備っつっても、もうほとんど出来ているが……。オレがその様子をしばらく見つめていると、蘭はその視線に気付いたらしい。
オレにいつもの笑顔で微笑みかけてきた。

「あ、コナン君おはよう。ご飯出来てるよ」
「……え？あ、うん」
蘭の言葉に、オレは少し戸惑ってしまった。『おはよう。誕生日おめでとうコナン君』という言葉を少しはかり期待していたからだ。
オレは「…いただきます」と箸をゆっくりと進めつつ、蘭の様子を見つめた。
特に変わった様子はない。いつもの蘭だ。

――おいおい。もしかして忘れてる？

オレはなぜか少し寂しい気持ちになる。
「あの……蘭姉ちゃん？」　無意識にオレの口から零れた、大切な幼馴染の名を呼ぶ声。それは少しだけ寂しげな声で、オレは心の中で少し、笑う。
「ん？どうかした？」
きょとんとした様子の蘭の声。
「あ、いや……なんでもない」

やっぱり忘れてるんだろうか。

＊＊＊＊＊＊

コナン&新一誕生日記念小説
【ぬくもり。】

（蘭のやつ……結局言ってくれなかったなぁ）

オレは釈然としない思いを抱えながら、博士の家へ向かう道を歩いていた。
あいつら（博士も含む）とGWに映画を観に行こうという約束をしていたのだ。
博士の家へ繋がっている道に曲がると、すぐにあいつらの姿が見えた。
「「「おはよう」」」
「……おはよう」
灰原の眠そうな声が、みんなより遅れて聞こえてきたことくらい

しか、特に変わったことはなかった。
……いや、それはいつものことか。
誕生日を祝う言葉は一つもない。本当に普段と変わらない態度だ。
だが、灰原を除く3人がいつもよりニコニコとした表情をしてるのは気のせいだろうか。――ただたんに映画が楽しみなだけかもな。

なんだよ……。みんな忘れてるのかよ。
だからといって、「今日はオレの誕生日なんだから祝えよ」なんて言えないが。

しばらくしたら博士が出てきた。
「いやーすまんすまん。仕度に手間取ってしまったわい」
「博士遅ーい」
「待ちくたびれてましたよー」
「早くしろよなー」
「……昨日遅くまで今日観に行く映画のパンフを読んでたからよ」
なーんてことを口々に言われている博士を、オレはなんとなく見た。

……まさか博士まで忘れてないよな?

「じゃあ、映画に行くとするかのぉ。ホレ、しん…じゃなくてコナン君も早く乗るんじゃ」

ってオイ。博士もかよ。
オレの誕生日スルーかよ。おい。

＊＊＊＊＊＊

映画を見終わってホッと一息。
内容は結構面白かったけどなぁ。なんかイマイチ楽しめなかったなぁ……。

「映画面白かったね。歩美も飛行船に乗ってみたいなー」
「主人公が飛行船の外に投げ飛ばされた時はハラハラしたぜー」
「ボクも怪盗キッドみたいに空を飛んでみたいです。ね、灰原さん」
「そうね」
　さっき観た映画の感想を言いあうこいつら。
オレはテキトウに「なかなかよかったぜ」と言っておいた。

そんな風にしばらく話をした後、あいつらと別れた。あいつらがやけにそわそわしてたり、異常に笑顔だったのには気になったが。
オレはそのまま博士の家へと行った。
そこで、オレは出されたコーヒーを飲みながら、ぼーっとニュースを見ていた。特にやることはない。
そんな時、ズボンのポケットに入れてある携帯電話のバイブが鳴った。
オレは携帯を開く。どうやら蘭からメールらしい。
少し期待してしまった自分がいる。だが、メールを読んですぐ、その考えは打ち砕かれた。

【コナン君、ごめーん。頼み事があるの
私部活の練習が長引いてまだ帰れそうにないんだぁ
お父さんは麻雀に出かけちゃったし…
だから、スーパー米花で牛乳とにんじんを買ってきてくれない？
ホントにごめんね。その分のお金はまたあとで返すから】

読み終わった瞬間、なぜか寂しさを覚えた。ため息をついた後、蘭

のメールを考察してみる。
蘭にしては珍しいな。オレにおつかいを頼むなんて。
でも、おっちゃんも不在なら仕方ないか……。
はぁ。
今日はオレの誕生日なのになぁ。おつかいかよ。

灰原はそんなオレの様子に気付いたらしい。いちいち噛みついてくる。
「大切な彼女からメール？それにしては元気ないわね」
と、からかうような口調。
「……。今日はオレの誕生日だってのに、蘭のやつオレにおつかいなんて頼んでくるんだぜ。それに朝、誕生日のこと何も言われなかったし」
「あら、そうだったの。で、本当のあなたの誕生日、彼女から祝ってもらったの？」
灰原の少し含みのある言葉に少々むっとなりつつ、オレははっとなる。

そういえば蘭から”新一”宛てメールもらってない。
どうしてだよ。オレはともかく、あいつはオレの誕生日を忘れたことなんてなかったのに。
しばらくオレと会わない内に、オレの誕生日なんて忘れられてしまったのだろうか。
なんかすごくショックだ……。
コトン、とコーヒーカップを置く。オレは肩を落としながら、ふらふらとソファから立ち上がった。

「灰原……じゃあな。蘭におつかいを頼まれてるんだ」
「あら、そう」

オレは心もとなしといった状態で荷物をまとめ、玄関へと向かう。

「いつも大切な彼女を苦しめてるあなたに比べれば、可愛いものなんじゃない？」

灰原が何か呟いたような気がしたが、よく聞き取れなかった。
聞き返したとしても、「別に」と言われるような気がしたし、だいたいそんな余裕すらなかった。

＊＊＊＊＊

（まさか両方のオレの存在が消えかかっている……なーんてことあるわけねーよな）

なんで誰も”オレ達”の誕生日を祝ってくれねーんだよ。
そんな風に、自分が誕生日を祝って欲しいと強く望んでいることに驚いた。
誕生日を祝ってもらうことは照れ臭いと思っていたが、ないと結構寂しいものだ。今日はそれを実感した。

オレは探偵事務所（コナンのウチ）に帰る道をトボトボと歩いた。
その子どもの手に握るレジ袋には、ちゃんと牛乳とにんじんが入っている。

数分後には、事務所の前に着いていた。

オレはいつもまして重い、事務所の扉をゆっくりと開ける。

「せーのっ」

聞き慣れた優しく柔らかい声……。

パンパンパーン☆

「「「コナン君お誕生日おめでとう！！！」」」

オレはびっくりして前を見る。

そこには「コナン君お誕生日おめでとう」と書かれたプレートが飾ってあった。どうやらあいつらの文字らしい。

オレを見るみんなは、優しく笑っていた。

蘭はもちろんのこと博士や歩美ちゃんに元太と光彦、灰原、こ、小林先生に、和葉ちゃんに服部までいやがる。恥ずかしげにそっぽを向いたおっちゃんも。

――今、ここに確かな温もりがある。

「みんな――」

オレが言い切る前に、ふわりと体が浮いた。優しく、柔らかくて、そして愛しい不思議な感じがした。

その温もりの主はやっぱり蘭だった。

服部や灰原がオレをからかうような表情をしていたが、あえて気付かないフリをして、しばらく蘭に抱きしめられていた。

……ってか灰原のやつ、知っててオレをからかってやがったな。

なんてことも今は考えるのはやめておこう。

蘭の温もりに、少しの間寂しかった心が満たされた気がした。

ただ、温もりが欲しかったんだ……。
――この架空の存在を包み込んでくれる温もりが欲しかった。
その温もりは確かに……はじめからオレのそばにあった。
――ありがとな、蘭。みんな。

そんなオレの仲間達によるパーティーは夜まで続いた。

＊＊＊＊＊

そのあと、蘭から新一の誕生日を祝うメールが届いたのは言うまでもない。
気になるその内容は……

【新一誕生日おめでとう
私からなかなかお祝いメールが来なくてびっくりした？（＾＾）
そんな訳ないか。毎年、誕生日忘れてるんだもんね
この私のメールで思い出してたりして♪
今日はコナン君の誕生日パーティーをやったの。もちろん誕生日プレゼントも渡したのよ
でも、新一へのプレゼントは戻ってくるまでお預けだからねっ
プレゼントが欲しければ早く帰ってくるのね。ハッピーバースデー新一♪】

（バーロ、もう最高のプレゼントはもらったぜ……）

お前の温もりをな。
今度はオレがお前に温もりを届ける番だから待っていてくれ……。
――必ず、生きて帰ってくっからよ。

（後書き）

お久し振りです。月影です。
……実は3日前まで彼の誕生日を本気で忘れてました。
コナンと新一本当にごめんっ（笑）
なので2，3日しか小説を書く時間が取れませんでした。
でもなんとか書き上げましたヨ！
短編でも書き上げるのに1年以上費やしているものもあり（実はまだアップ
してません（＾＾；））、今回のはたったの3日（2日？）で、かなりしょぼくなってしまいました。
期待されて読まれた方、すみません。

ま、とりあえず誕生日おめでとう。（逃亡）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2323l/

ぬくもり。

2010年10月28日06時53分発行